

川内川の土木遺産ツーリズムに関する一考察*

Study on tourism of civil engineering heritage in Sendai River

藤田将史**・田中尚人***・岩田圭佑****・永村景子****

By Masafumi FUJITA, Naoto TANAKA, Keisuke IWATA and Keiko NAGAMURA

河川法において「河川環境の整備と保全」が位置付けられ、河川管理の状況も変化している。川内川においても「川内川らしさ」を活かした河川整備を進め、地域住民の関心を高めることが、河川整備基本方針や整備計画において明言されている。また、現在ニューツーリズムと呼ばれる体験・学習型の観光が注目され、観光立国が国の政策において重要な位置付けにある。本研究の目的は、川内川流域の地域づくり方策として、土木遺産ツーリズムの有効性を示すことである。そのためにまず、川内川流域の現況調査及び課題の抽出を行う。次に、土木遺産や既に実践されているツーリズムを整理することにより、土木遺産ツーリズムを定義する。そのうえで、川内川流域の伊佐市周辺を題材にとり、川内川の土木遺産ツーリズムの有効性を考察する。

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

河川法において、「河川環境の整備と保全」が位置付けられ、河川管理の状況も変化しており、川内川においても、「川内川らしさ」を活かした河川整備を進め、地域住民の関心を高める方針を示している。また、現在観光立国が国の政策において重要な位置付けにあり、近年では、従来の物見遊山の観光に対して、テーマ性が強く体験・学習の要素を取り入れた、ニューツーリズムという新しい形の観光が注目されている。

本研究の目的は、川内川流域における地域づくり方策として、土木遺産ツーリズムの有効性を示すことである。そのためにまず、川内川流域の課題を抽出する。次に、本研究における土木遺産ツーリズムを定義する。そのうえで、川内川流域の鹿児島県伊佐市を題材に、川内川の土木遺産ツーリズムの有効性を考察する。

(2) 既往研究

ツーリズムと地域振興に関する既往研究として、地域振興におけるエコツーリズムの効果と展開の方向性を示した森の研究¹⁾がある。土木遺産の評価に関する既往研究として、土木遺産ツアー構成のあり方を明らかにするために、土木遺産を群として捉え関係付けさせた原口ら²⁾の研究がある。遺産活用によるまちづくりに関する既往研究として、近代化遺産の価値を再考し、資源の再活用による地域活性化を図る上で求められるまちづくりのあり方を明らかにした新井の研究³⁾がある。

本研究は、治水・利水の歴史を川内川流域の特徴と捉え、川内川の土木遺産を系譜的価値に着目して評価した

点や土木遺産ツーリズムを定義し、これを地域づくりの方策として考察した点に特徴がある。

2. 川内川流域の現況調査及び課題の抽出

川内川は九州第2位の長さを誇る一級河川である。流域平野部では稲作が盛んなため、河川水の利用が積極的に行われている。しかし、他の河川に比べ治水対策が遅れていたため、度々水害による被害を経験してきた。本章では、川内川流域の現況調査として、川内川の概要及び土木事業を整理した。さらにそこから、現在の川内川流域の課題の抽出を行った。

(1) 川内川の概要

川内川は、幹川流路延長 137 km、流域面積 1,600km²の一級河川⁴⁾である。平成 12 年度の調査では、川内川流域内の人口は約 20 万人で、人口密度は約 120 人/km²である。比較的下流部まで山に囲まれており、人口・資産の集中する流域市町は、団子のように川内川に貫かれている(図1)。その他特徴を把握するために、地形や歴史などを整理した。

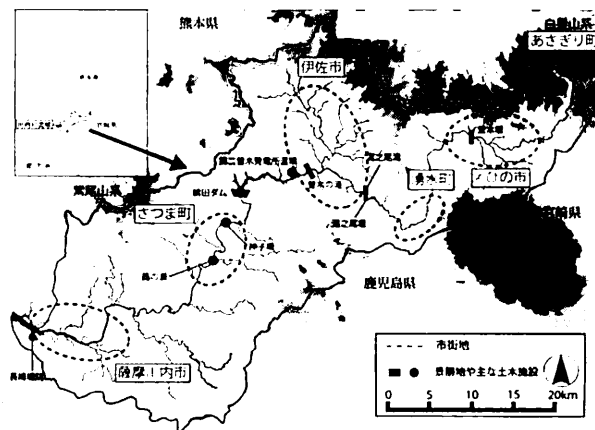


図1 川内川流域図 (作成:筆者)

*Keywords: 土木遺産, 地域づくり, 川内川, ツーリズム

**学生員 熊本大学大学院自然科学研究科 博士前期課程
(〒860-8555 熊本市黒髪2丁目39番1号)

***正会員 博(工)熊本大学政策創造研究教育センター 准教授

****学生員 修(工)熊本大学大学院自然科学研究科 博士後期課程

まず、地形的特徴として、川内川は盆地と狭窄部が交互に繋がり、河床勾配は急勾配と緩勾配が交互に現われる形状となっている。そのため、洪水時に平野部において氾濫が起こりやすく、その盆地や平野部に人口や資産が集中しているため、水害の被害が多く出ている。

また、「川内川の歴史は洪水の歴史である」と言われるほど川内川では洪水が起きており、堤防の決壊による田畑の埋没や人畜の死傷、家屋の流失など様々な被害が出ている。このような事態が幾度か繰り返されたことが、川内川の治水事業の動機になっている。洪水回数は、記録が整理されはじめた1539（天文9）年から1979（昭和54）年に至る440年間に188回の記録がある。このように、平均2年に1度程度で洪水が発生している。

川内川の治水計画については、最も古い改修工事は江戸時代にさかのぼるが、島津藩主による川内川の治水・利水の事蹟は貧しく、この時代から他藩の河川より1・2世紀おくとれていると言われる。江戸時代に行われた主な土木事業は、高江村長崎堤防建設、菱刈村下手川改修、宮之城嶺の瀬開削、高江村八間川開削がある。

さらに、川内川流域の平野部は、山に囲まれ盆地を形成しているため、内陸性気候をもち、稲作には最適の地帯とされ、稲作が営まれてきた。2006（平成18）年度末時点の、川内川における利水状況を見ても、水利権量は26件で、農業用水が17件、工業用水2件、発電用水5件、上水道用水2件と農業用水が高い割合を占めていることが分かる。水量や流域の大きさから見て他河川より開発が遅れていたため、上水道用水の利用も低く、専ら灌漑用水に利用されていたのである。また、田んぼを守り豊作をもたらす農業神である「田の神」は、「タノカンサア」とも呼ばれ、各地に石像が祭られ地域住民に親しまれている。なお、各地に祭られている「田の神」は県指定の文化財であり、地元の小学校の授業等でもあつかわれている。

（2）川内川と土木施設

川内川は地形的特徴や歴史から、土木施設を必要としてきたことが分かる。本節では、川内川における土木事業を把握するために、利水事業・治水事業の2つに分けて整理した。

まず、利水事業について、川内川における取水状況は農業・発電用水で8割以上を占めている。川内川流域では農業が盛んであり、広大な盆地の灌漑のために利水事業が行われ、その際に造られた施設が多く存在する。中には難航を極め、石碑が残されているものもある。

次に、川内川では幾度も氾濫が繰り返されているため、様々な治水事業が行われてきた。洪水や治水計画、実際に行われた事業の関係を把握するため、川内川における洪水と旧河川法適用以降の治水の歴史を整理した（表1）。

平成に至るまでに様々な治水事業を展開してきたものの、1989（平成1）年～2005（平成17）年、さらに2006（平成18）年7月22日洪水では、観測史上最大高水位を観測し、甚大な被害が発生した。そのため、2006（平成18）年10月より直轄河川激甚災害対策特別緊急事業（以下、激

表1 洪水と治水計画及び土木事業の関係（作成：筆者）

年次	河川	治水計画	治水事業	利水事業	利水事業
1539	川内川	天文9年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1540	川内川	天文10年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1541	川内川	天文11年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1542	川内川	天文12年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1543	川内川	天文13年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1544	川内川	天文14年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1545	川内川	天文15年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1546	川内川	天文16年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1547	川内川	天文17年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1548	川内川	天文18年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1549	川内川	天文19年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1550	川内川	天文20年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1551	川内川	天文21年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1552	川内川	天文22年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1553	川内川	天文23年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1554	川内川	天文24年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1555	川内川	天文25年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1556	川内川	天文26年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1557	川内川	天文27年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1558	川内川	天文28年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1559	川内川	天文29年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1560	川内川	天文30年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1561	川内川	天文31年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1562	川内川	天文32年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1563	川内川	天文33年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1564	川内川	天文34年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1565	川内川	天文35年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1566	川内川	天文36年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1567	川内川	天文37年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1568	川内川	天文38年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1569	川内川	天文39年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1570	川内川	天文40年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1571	川内川	天文41年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1572	川内川	天文42年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1573	川内川	天文43年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1574	川内川	天文44年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1575	川内川	天文45年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1576	川内川	天文46年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1577	川内川	天文47年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1578	川内川	天文48年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1579	川内川	天文49年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1580	川内川	天文50年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1581	川内川	天文51年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1582	川内川	天文52年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1583	川内川	天文53年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1584	川内川	天文54年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1585	川内川	天文55年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1586	川内川	天文56年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1587	川内川	天文57年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1588	川内川	天文58年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1589	川内川	天文59年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1590	川内川	天文60年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1591	川内川	天文61年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1592	川内川	天文62年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1593	川内川	天文63年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1594	川内川	天文64年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1595	川内川	天文65年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1596	川内川	天文66年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1597	川内川	天文67年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1598	川内川	天文68年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1599	川内川	天文69年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1600	川内川	天文70年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1601	川内川	天文71年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1602	川内川	天文72年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1603	川内川	天文73年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1604	川内川	天文74年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1605	川内川	天文75年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1606	川内川	天文76年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1607	川内川	天文77年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1608	川内川	天文78年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1609	川内川	天文79年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1610	川内川	天文80年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1611	川内川	天文81年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1612	川内川	天文82年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1613	川内川	天文83年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1614	川内川	天文84年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1615	川内川	天文85年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1616	川内川	天文86年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1617	川内川	天文87年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1618	川内川	天文88年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1619	川内川	天文89年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1620	川内川	天文90年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1621	川内川	天文91年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1622	川内川	天文92年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1623	川内川	天文93年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1624	川内川	天文94年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1625	川内川	天文95年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1626	川内川	天文96年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1627	川内川	天文97年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1628	川内川	天文98年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1629	川内川	天文99年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水
1630	川内川	天文100年洪水	長崎堤防建設	上水道用水	上水道用水

特事業）、2007（平成19）年4月より鶴田ダム再開発事業が行われている。

以上より、川内川の概要を把握し、川内川と土木事業との関わりをみた。川内川流域は、地形的特徴から急勾配と緩勾配を繰り返し、平野部において氾濫しやすい。また社会的特徴から、平野部に人口や資産が集中しているため、度々洪水の被害に遭う。よって、治水施設を必要とする地域であると言える。しかし、流域では農業が盛んであり、発電も行われているため、利水の意義も大きいと言える。つまり治水・利水をバランスよく行う必要があり、これまで様々な工夫がされてきたことが考えられる。

（3）川内川流域の課題の抽出

以上の内容は、川内川流域の特徴であり、川内川を知る上で欠くことのできない事柄である。ここで、流域の特徴を活かす上で考えられる課題を以下に挙げる。

- 1）平成に至るまでに様々な治水計画をたて、事業を行ってきたが、これから先も計画を上回る洪水が発生する可能性はあるため、ひき続き治水事業を進めていかなければならない。
- 2）流域で暮らしている人々にとって、治水や利水の歴史は日常生活の一部でしかなく、資源に繋がる特徴とは考えない。
- 3）近年では、治水や利水などの歴史や構造物等を地域の特徴として捉え、資源として活かそうという動きがみられる。しかし、資源が点在している。

以上より本章では、川内川流域の地質・地形、治水や利水の歴史などの現況を調査し、課題の抽出を行った。

3. 土木遺産ツーリズムの定義

本章では、土木遺産ツーリズムを定義する。そのためにまず、土木遺産の既存価値を整理し、狭義の土木遺産を定義した。次に、系譜的価値に着目した川内川における土木遺産を新たに定義し、狭義の土木遺産と併せ、広義の土木遺産を定義した。また、実践されている様々なツーリズムを整理した。

(1) 土木遺産の定義

本研究では、文化庁や土木学会によって既に価値の付けられている土木遺産を「狭義の土木遺産」とする。

しかし、川内川流域には地域の歴史や土木技術の進歩を示す土木施設が存在し、これらはこれからのまちづくりに活かすことのできるものと考え、よって、狭義の土木遺産に加えて、川内川流域において「土木施設（現役供用中を含む）、特に系譜的価値に着目して評価したもの」を、川内川における土木遺産とする。

本研究では、狭義の土木遺産に川内川における土木遺産を加えたものを、広義の土木遺産とし、ツーリズムの対象として扱う。

(2) ツーリズムの定義

現在、テーマ性が強く、体験・学習的要素を取り入れた観光として、ニューツーリズムが注目されている。また、ニューツーリズムは、地域の特性を活かしやすいことから、地域づくりにつながるものとして期待されており、既に様々なツーリズムが実践されている。ツーリズムには、体験・学習する内容を示すテーマがあり、それぞれ体験・学習的要素を含んでいる(表2)。

以上より、ツーリズムとは地域が主体となり、その土地の人や自然、歴史や生活文化を体験・学習することを目的とするものであると言える。またそれは、地域の人と会話をするなどして、直接学ぶ事が重要である。

表2 ツーリズムの一覧(作成:筆者)

テーマ	モノ	体験・学習的要素				
		産業	歴史	生活	文化	自然
エコツーリズム			○		○	○
グリーンツーリズム		○		○	○	
ヘルスツーリズム				○		○
ヘリテージツーリズム	○	○	○			
土木遺産ツーリズム	○	○	○	○	○	

(3) 土木遺産ツーリズムの定義

本研究では土木遺産ツーリズムを、土木遺産を題材に地域の歴史や人々の生活・生業(治水や利水)技術を学び、土木施設の支えてきた地域の暮らしや生活文化を体験するものと考え、グリーン+ヘリテージツーリズムと考える(表2に示す)。

4. 土木遺産ツーリズムの考察

2章で抽出した川内川流域の課題を解決する手段として、3章で定義した土木遺産ツーリズムを考察する。そこで事例として、鹿児島県伊佐市を取り上げた。まず、伊佐市の概要を把握し、川内川との関わりをみる伊佐市の特徴を考察する。次に、伊佐市での出来事と、それを表す施設や地域などとのつながりを明らかにする。最後に、川内川の土木遺産ツーリズムの有効性を考察する。

(1) 川内川流域における伊佐市の特徴

伊佐市は平成20年に旧大口市・菱刈町が合併し、発足し、鹿児島県の最北に位置し、東は宮崎県えびの市、北東は熊本県人吉市と隣接している⁵⁾。伊佐市には、曾木の滝等の景勝地や、発電所遺構等の歴史的建造物も存在する。近年は、風土に根ざした人づくりへの取り組みなど、地域資源を活かす積極的な取り組みも見られる。

(2) 土木遺産ツーリズムの素材

伊佐市には、地域づくりの資源であり、土木遺産ツーリズムの素材となりえるものが多く存在すると言える。表3はその歴史と資源との関係を整理したものである。また、図3では資源の位置を示した。ここで、点在する資源と、川内川周辺で行われた土木事業をつなぐため、関係を整理した。

伊佐市周辺に存在している資源を、川内川に存在するモノ(以下、モノ)とし、川内川周辺で行われた土木事業を、川内川で起きたコト(以下、コト)として、両者をつなぐと考えられるものがたりを基に、コトとモノの整理を行う。今回は菱刈平野の灌漑と洪水・天保の川ざらえを例にとり説明する。

a) 菱刈平野の灌漑と洪水: 現在町の名勝の一つに数えられ、親しまれている「湯之尾滝」は、江戸時代に洪水調節と灌漑を目的として造られた人口の滝である。これにより、広大の菱刈平野の灌漑が可能となった。菱刈平野は大口などと共に「菱刈七ヶ郷」と呼ばれるようになり、このことが後の天保の川ざらえに繋がることになる。しかし昭和に入り、湯之尾滝の堰上げが一つの原因となり、上流部の湯之尾温泉街では度々洪水の被害を受けていた。そのため、新たに分水路を開削し、水位調節のた

表3 歴史と資源の関係(作成:筆者)

年号	西暦(年)	治水・利水事業	施設、地域、景勝地など			
江戸	1661	人工滝(湯之尾滝)及び用水溝の建設に着工 用水溝の改修 新たに北溝を建設し、中央溝を埋める 用水溝の改修 川ざらえ工事着工 川ざらえ工事竣工	菱刈平野の灌漑	湯之尾滝	用水路	
	1680					
	1804					
	1818					
	1841					
	1843	天保の川ざらえ	轟の瀬	神子轟堰	下木場船着場跡	
明治	1906	曾木電気(株)を設立、第一発電所建設着工 第一発電所完成 第二発電所完成ー第一発電所閉鎖、日本窒素肥料(株)を設立	発電所遺構	発電所遺構	ヘッドタンク跡	取水口跡
	1907					
	1909					
大正	1912					
	1925					
昭和	1950	鶴田ダムの予備調査開始 鶴田ダム調査事務所を開設 鶴田ダム工事事務所となり、工事着工 第二発電所廃止 鶴田ダム完成 鶴田ダム管理所設置(当時九州管内で初めて)	ダム建設	鶴田ダム	川内川中下流域	下木場集落
	1959					
	1960					
	1965					
	1966					
	1967	洪水対策	湯之尾堰	湯之尾温泉街	影響	
	1971					
	1972					
川内川に存在するモノ			ものがたり	川内川で起きたコト		

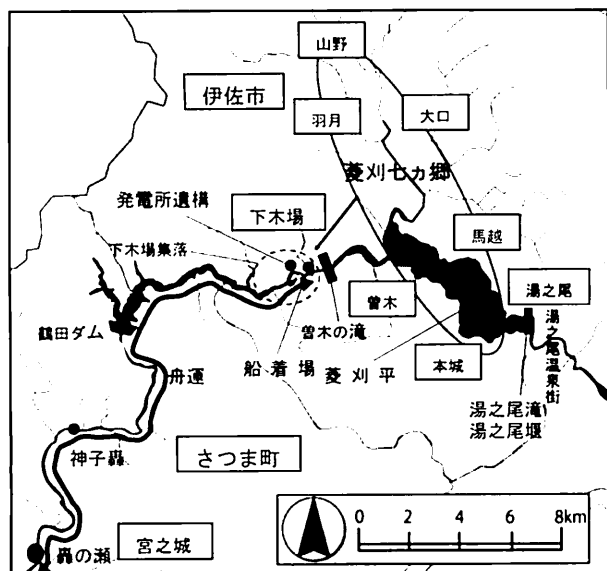


図3 素材の分布（作成：筆者）

め可動堰が設けられた。

b) 天保の川ざらえ：菱刈七カ郷の農民は、さつま町の宮之城まで陸路で上納米を運搬しなければならなかった。このような農民を救済するため、下木場に残る船着場跡から、宮之城までの舟運を可能とした事業が、天保の川ざらえである。発電のために造られた「神子堰」には、舟運の跡が残り、景勝地「轟の瀬」もこの事業の跡である。また、権太郎石と呼ばれる石碑も発見されている。

以上、川内川のものがたりを基にコトとモノを整理した。まず、土木に着目したことで、ものがたりが歴史を軸としてつながる。そのものがたりを基にコトとモノを整理することにより、体験・学習的要素が生じる。よってこれを土木遺産ツーリズムの素材とする。素材同士は、体験・学習的要素により空間的なつながりを持つ(図4)。そして、個々の素材が体験・学習的要素でつながり、それを川内川の治水、利水に関する一つの大きなものがたりとして捉え、体験・学習することが川内川の土木遺産ツーリズムである。

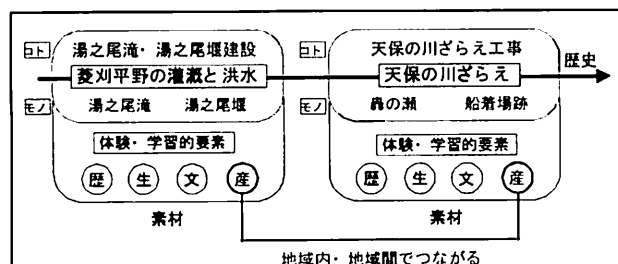


図4 素材のつながり（作成：筆者）

(3) 土木遺産ツーリズムの有効性の考察

土木遺産ツーリズムの4つの素材が持つ体験・学習的要素（以下、要素）は、産業と歴史は一致したが、その他3つの要素は一致しなかった（表4）。そのため、さらに素材の数を増やし、考察する必要があると考える。

コトとモノを、ものがたりを基に整理し土木遺産ツーリズムの素材として捉える。そうすることで、素材同士の体験・学習的要素を通して、点在するモノが空間的につながる。点在するモノや、モノが現しているコト、両者をつな

表4 土木遺産ツーリズムの比較（作成：筆者）

	モノ	コト	体験・学習的要素			
			歴史	産業	文化	自然
1	伊佐市	存在する	○	○	○	○
2	下木場	存在する	○	○	○	○
3	湯之尾	存在する	○	○	○	○
4	湯之尾	存在する	○	○	○	○
5	湯之尾	存在する	○	○	○	○
6	湯之尾	存在する	○	○	○	○
7	湯之尾	存在する	○	○	○	○
8	湯之尾	存在する	○	○	○	○
9	湯之尾	存在する	○	○	○	○
10	湯之尾	存在する	○	○	○	○
11	湯之尾	存在する	○	○	○	○

ぐものがたりは、土木遺産ツーリズムの一つの素材として捉えることで、川内川という大きなものがたりとしての可能性を有するといえる。

5. おわりに

本研究ではまず、川内川流域の特徴を把握することにより、流域の地域づくりにおける課題として以下の3点を抽出した。

- 1) 持続的な河川整備の必要性があること。
- 2) 地域住民が、治水・利水の歴史を資源として捉えていないこと。
- 3) 資源が点在していること

次に、土木遺産ツーリズムを定義し、伊佐市を題材にその有効性を考察した。土木遺産ツーリズムは、流域に点在する素材同士を空間的につなぐことができ、3)の課題に対して有効といえる。さらにこうした手段を重ねることで、1) 2)の課題を克服する取り組みへと展開できるのではなかろうか。こうした有効性をさらに検証するためにも、より多くの素材を抽出し、流域における地域づくりの実践の場に持ち込むことが必要といえる。

参考文献

- 1) 森信之：エコツーリズムと地域振興，大阪明浄大学紀要，第1号，pp.77-91，2001
- 2) 原口征人，今尚人，進藤義郎：石狩川土木遺産ツアーにみる土木遺産の評価に関する研究，土木史研究・講演集，vol.30，pp.141-144，2010
- 3) 新井直樹：近代化遺産を活用した観光振興とまちづくり－富岡製糸場 世界遺産プロジェクトの展開と課題－、『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）第8巻，第3号，201-218頁，2006
- 4) 国土交通省九州地方整備局：川内川水系河川整備計画，p.1，2，23，2010
- 5) 株式会社ツーリズム・マーケティング研究所 HP：<http://www.tourism.jp/index.php>
- 6) 新満 益雄：悠久の流れ 川内川改修工事の思い出の記，自費出版，p.14，2003
- 7) 菱刈町郷土誌編さん委員会：菱刈町郷土誌 改訂版，菱刈町，pp.394-395，2007
- 8) 大口市郷土誌編さん委員会：大口市郷土誌 上巻，鹿児島県大口市長大橋利夫，1999
- 9) 大口市郷土誌編さん委員会：大口市郷土誌 下巻，鹿児島県大口市，1990
- 10) 鹿児島県伊佐市：平成21年度版 統計いき，鹿児島県伊佐市，pp.3-23，2010
- 11) 尾家建生・金井高造：これでわかる！着地型観光－地域が主役のツーリズム－，学芸出版社，2008